

子ども会(学習会)だより

MY SKY No. 6

マイ・スカイ

1997年5月27日火曜日発行(毎週火曜日子まぐれ発行)

発行者

板野中学校

学習会

編集・文責:吉成正士

前号のMY SKYを読んで、担任の先生方からたくさんの感想がよせられました。その中の一つを紹介させてもらおうと同時に、^{かんれん}関連する新聞記事を見てもらおうと思います。

私は、MY SKYを読んで「あっ」と思ったところがありました。それは最後の方の部分で、『僕は部落差別なんかしない。差別するようなそんな^{おろ}愚かな人間じゃない。だから部落差別なんか関係ないよ』というところです。私も「差別なんかしない。してない」と小学校の時思ったことがありました。でも、こんな^{ふう}風に思っている人が差別をしているのかもしれない。例えば、『愚か』という言葉から、「人より上」「自分の方が人より偉い」という上下関係を作っていると思えました。だから、差別は自分には関係ないというのは^{うそ}嘘だなあと思いました。本当に差別なんかしないというのなら、関係ないなんて言わないと思います。なくすためにみんなで考えていくんじゃないかと思います。この文の通り、自分の問題として考えなくてはいけないと思

「十年後にエイズがなくなれば、センターなんてつぶしても構いませんよ」。さりとて口調にエイズ撲滅への強い意志がのぞく。

熊本大がこのほど設立した「エイズ学研究センター」の初代センター長。エイズウイルス(HIV)の感染メカニズム解明など医学的な研究だけでなく、感染者差別などの社会的分野にも総合的に取り組む国内初の研究機関だ。

設立前、「センターの名称が周辺住民に不安を与えかねない」と心配する声もあったが、あくまで「エイズ」の三文字にこだわった。「根強い偏見に氣を取られている暇はない。病気に真正面向き合っただ、とい

専門は感染防御学。米国ネブラスカ大留学中の一九八一―八四年、全米を襲ったエイズ・パニックに直面した。帰国後、勤務先の山口大医学部でHIVに感染しやすいように改造した細胞を使った実験に立ち会い「これだけはきりと究はロマンの領域だ」と説く。

学生にはいつも「ウイルス研

防衛学。米国ネブラスカ大

初代熊本大エイズ学研究センター長に就任した



原田 信志さん

「試験管内の小さな小さな出来事が、世界規模の大きな現象につながる。研究者のイメージが頼りなんです」と両手を広げた。六月には国内で初めて、HIV感染者への遺伝子治療が熊本大病院で実施される見通し。三月に中央薬事審議会の承認を受けるまでの約二年間は事務作業に忙殺された。

「つい最近まで、まだこの二倍もあったんですよ」と指した先には五十センチ以上に積み上げられた書類の山。「早く本来の研究がしたい」とため息がもれた。二人の子供はすでに親元を離れ、関西の医大で勉強中。休日は夫人と自宅近くの自然公園に足をとる。四十七歳。熊本県出身。

いました。しっかり勉強していきたいです。

エイズに対する差別もあると思います。エイズに^{かんせん}感染している人が近くにいるとしたら、私はどういう態度をとるのでしょうか？

自然を守るのも、とても大事なことです。自然がなくなれば生きていけません。少しずつでもリサイクルなどをしていきたいです。世の中にはたくさん問題がありますね。

本当にたくさん問題がありますね。でもその中で生きているのは私たちです。それに、うえの新聞記事のような人物もいるんです。目を背けることなく、^{ましようめん}真正面から受け止めていきたいものです。



☆ 1997年度学習会保護者会(5月12・14・16日;板野中学校会議室)

『部落問題について勉強するんだったら、^{ちゅうはんぽ}中途半端でなしに、突っ込んでやってほしい』

今年度の学習会開講式が5会場合同で開かれたのをうけて、保護者会を^{たんい}学年単位で開催しました。のべ50名あまりの参加者の中で出てきた意見の一つです。

実は他にもいろんな^{ことがら}事柄について話し合いがされました。

I パンについて

この件については、以前から問題が^{してき}指摘されていました。果たして^{せいちょうき}成長期の子どもたちが、^{ゆうがた}夕方から夜にかけて食べるものとして、菓子パンが^{か し}適切かどうか……。

実はこのパンの^{せいど}制度ができたには、^{わけ}訳があります。

学校が終わって部活に行き、そのまま学習会に参加する生徒がたくさんいる。成長期だから、ただでさえ^{なかへ}お腹が減る。その上^{はげ}激しい部活をして学習会に行けば、さらにお腹が減る。これで果たして勉強に集中できるのか……？せめてお腹に何か入れさせて、部落差別解消のための学習をさせてやりたい。

こういう保護者たちの願いのもと、運動が^{ぎょうせい}起こり、行政に働きかけ勝ち取ることができたのが、パン・ジュースの制度なのです。当然これらは、1965年に^{とうぜん}出された^{どうたいしんとう}同対審答^{しん おおもと}申が大元になっています。

ところが^{さき}先にも書いたように、問題点があることも事実です。それで「^{かいぜん}どうか改善できないものか……」と保護者会に相談を持ちかけた^{しだい}次第なんです。母親サイドから見た、いろんな意見を聞くことができました。

・うちの子は「中学生になったらパンとジュースをくれる」と楽しみにしている

- ・ 7:00に家に帰る学習の日はドリンクだけで充分で、食べ物はいらないのでは？
- ・ 8:00まで食べないのは、さすがにキツイ
- ・ 食べるのなら、パンよりもおにぎりの方がベター
- ・ 基本的に、やはり家のご飯^{はん}を食べさせたい
- ・ 学習会の食べ物は、お腹がもたれない、つなぎ程度^{ていど}のものにしてはどうか

「さすがお母さん！」という感じです。私たちに^{するど}見えてない部分を^{してき}鋭く指摘してくれました。

まだはっきりしたことは決まっていますが、とりあえず今年度^{けんねん}の方針を決め、学習会をより良いものにしていきたいと思います。

ただ一つ押さえておきたい重^{おも}要^{じゅうよう}なポイントは、「すべての人が、この制度の本当の意味をよ〜く理解すること」と「この制度の本当の意味をよ〜く理解して活用^{かつよう}すること」だと思いますが、みなさんはいかがでしょう？

II 親の思いと親の願い

他にも、親の思いや願いを、たくさん聞くことができました。

- ・ 学習会で親子バーベキュー大会やカラオケ大会を開いてもいいのでは？
- ・ 子どもも学習会に行くが、行事^{ぎょうじ}やイベントなどは親も好きなので、一緒に参加したい
- ・ 中学生になり悪くなってるようにも思えたが、「先生が好き」というので安心した
- ・ 先生と子どもがよい関係になってほしい
- ・ 友達関係を大切にする子であってほしい
- ・ 部活をしている途中^{とちゅう}で学習会に抜けるのを行きづらく思わないような取り組みを、顧問^{こんもん}の先生にしてほしい
- ・ 学習会に素直^{すなお}に気持ちよく行けるようになってほしい
- ・ 兄、姉が学習会に対して良い思い出をもっているので、進言^{しんげん}もしてくれるし、是非^{ぜひ}とも頑張^{がんば}って行ってほしい
- ・ 内弁慶^{うちべんけい}な子だから、人前^{ひとまえ}で喋^{しゃべ}れるようになってほしい
- ・ 交際^{こうさい}相手に、胸^{むね}を張^はって「部落出身です」と言える子にしたい

学習会の活動に対する要望^{ようぼう}、その中での期待^{きたい}する人間関係、そして学習会で本当に身につけてほしいことについて、思うまま話してくれました。ありがたい限りです。これらを通して感じることは、「やはり親として、我が子にイキイキ生きてほしいんだ！」という

ことでした。その思いの奥には、「こんなたっすい差別になんか負けてほしくない！だから正^{しょうめん}面から明るく向き合ってほしい！」という思いがあるように感じました。何故^{なぜ}そんな強い思いがあるのか？その理由^{じょういけん}についての^{じつたいけん}実験も、お話ししてくれました。

- ・ 私たちのことについて、聞^きこえよがしに背後^{はいご}から言われたこともあった
- ・ 部落外^{おつと}の夫^{じっか}の実家^{じつか}に行っても、茶碗^{ちやわん}すら洗わしてくれない
- ・ 部落外の女友達の家に娘が遊びに行ったとき、その母親に「女の子だからおつき合いしてもいい」と言われて帰ってきた

部落の仲間が聞けばうつむいてしまいそうになるかもしれませんが、うつむくことなんかありませんよ！だって、こんな人ばかりじゃないはずですよ！もっともっと心の純^{じゅん}粋^{すい}な人も、たくさんいるはずですよ。それに見てください！自分のお母さんを、お父さんを、おじいちゃんやおばあちゃんを！もしかすると、同じような体験をしてきてるかもしれません。それでも、大切に今まであなたたちを育てあげてくれてるんですよ。立派^{りっぱ}じゃないですか！そんな生き様^{いきさま}こそを、しっかり見つめましょうよ。

また、こんなことも言ってくれました。

「日頃^{ひごろ}顔を合わさない、同じ立場の保護者の思いをもっと聞かせてほしい。もし差別から目を背^{そむ}けてるなら、『親が逃げるな！』と言いたい。でも、自分自身何をしているのかと言われれば、何もできていない。何ができるのか、何をすればいいのかわからない……」

「本当のところそうだよな……」と思いました。子どもに対する思いはあるけど、実際どうしていいのかわからないし、それを学べる場もない……。もったいない話です。思いはあるのに！

実はそこで、希望する人が自由に参加できる「部落問題・同和教育」についての勉強会を開こうと思うのです。本当は教職^{きょうしやく}員^{いん}を対^{たい}象^{しやう}に考えていたんですが、いまだ誰からも参加の連絡がないので(さみしい……)、保護者にまで広げてみようと思うんです。初回は、5月30日(金)7:30から、とりあえず郡頭^{こうず}教育集会所で行おうと思います。他に何も決めていないので、当日いろいろ決められたらと思います。ちなみに、自主的でざっくばらんな会をイメージしてるので、興味のある方はぜひお越しください。事前にご連絡いただければいいのですが、飛び入りでも大歓迎^{だいかんげい}です。

きっかけは何でもいいと思います。みんなが本当に元気になる生き方を自分の手でつかみ、一度きりしかない人生をのびのびと、そしてイキイキと^{おおで}大^ふ手を振って歩いていけたらと思うのです！



さて、今週は3年生で、第1回目の全体学習があります。C組のみなさん、^{ひのきふたい}檜舞台です。同じやるなら、気持ちよく全^{ぜんりよく}力でやってみましょう！
また他の学級のみなさんも、全体授業での^{えん ごしやげきがんば}援護射撃頑張りましょう！

★☆☆ ★★★ ☆☆☆☆ ★★★★★ ☆☆☆ ★

5月28日(水) 解放子ども会(18:30~20:00; 総合センター)、中間テスト
29日(木) 3年C組学年全体学習(第3学年第1回資料「ある日の生活ノートより」)
30日(金) 「部落問題・同和教育」勉強会(19:30~; 郡頭教育集会所)



第2学年第2回全体学習(5校時)(97. 11. 20)



第2学年第3回全体学習(98. 2. 27)

和田武広講演会

『二度とない人生だから②』

私は自分が部落差別に直面したとき、確かに苦しいことか辛いことか、しんどい思いもいっぱいしました。でも、これは本当に正直に言うんですけど、私は部落差別にぶち当たって、その現実を目の前にして、本当にあのとき逃げずに良かったな、あのとき部落問題に出会って本当に良かったなど、心から思っております。それは、自分が部落差別という問題の現実を突きつけられたことによって「この問題は誰の問題でもない。自分がどの様に生きていくかという問題なんだ」というふうに思い、そして今自信を持って、本当に輝いて生きていこうというふうに思えるからです。

ということで、今日は私の体験というものを、聞いていただきたいと思えます。

まず私の生い立ちというか、プロフィールから申しますと、私は松山のすぐ隣の伊予市というところの農家の長男として生まれました。長男といって一番末っ子です。ですから、上二人はお姉さんですね。

ちょうどみなさん方と同じ思春期の頃、中学校の時、高校の時、将来の進路を巡っていろいろ悩んだこともございました。

「農家の長男だから、お前は家に残って、そして地元に残って家のあとを継いでほしい。それが長男の務めだ。」

という、非常に大きな周りの期待と重圧。それに対して自分としては「あれもしたい。これもしたい……」、そういう中で思春期を過ごしたと思います。

ただいろいろございましたが、結果的には地元に戻って就職するという、いうなれば周りの期待に添ったような形で、私の社会人としてのスタートがきられたわけです。

そして就職をして2年目の時に、仕事先で知り合った女性と恋愛をしまして、お互いに結婚しようということになったのです。それで、お互いの両親に紹介し、結婚する意思を伝えようじやないかということになったんです。

その時はちょうど今治市の方へ転勤しておりましたので、今治市から実家の伊予市の方へ早速帰りまして、両親に自分の結婚したいという意思を伝えただけです。ちょうど母しかいなかったのですが、母にこう言いました。

「母ちゃん、僕結婚しようと思うんですよ。」

「えっ、お前どっかにええ子でけたんか。どこの子や。どんな子や。お父さんは何しよる。」

母は大変喜んで、その彼女がどういふ人なのか、あるいはその家族がどういふ

のか、いろいろ聞いてきました。

「ぼちぼちお前の結婚相手を探さないと考えるとったけど、よく自分で見つけてきた。良かった。良かった。」

と、大変喜んでくれました。ただその時に一つだけ問題がありました。彼女も姉妹二人で農家だということです。それでどうも両親は、彼女に婿養子をとってほしいというような希望があるらしいということを、私がチラッと言いますと、母が急にちよつと心配しだして、

「武広それはちよつと難しいんじゃないか。相手もそのように養子望んでるんであれば、お前は一人息子だから、とても養子には出せないし、この結婚はなかなか難しいんじゃないかな。」

と、先ほどまでニコニコ喜んでたのが、急に沈んだ顔になったんですね。それに対して私は母にあんまり心配させてはいけないと思い、

「いや、母ちゃん大丈夫や。その婿養子のことは、きょうびのことだから、彼女のお父さんお母さんも半分諦めとるみたいだし、心配ないんじゃないの。その点は大丈夫や。」

と母に言いました。すると母は、

「そうか、それは良かったな。そしたらちゃんと調べとかないかな。」
このように言ったわけです。

「えっ、何を調べるの?」

とは私、訊きませんでした。訊かなくても、母の言ってる意味がすぐにわかったからです。この新居浜がどうかかわりませんが、私の住んでいる地方、少なくとも松山市周辺では、男女が結婚する際に、周りが相手の身元を調べるといふことが、大人の常識のような形で公然と行われていたことを知っていたのです。憲法では「男女の合意によつてのみ婚姻は成立する」というふうになっていますが、現実的には親戚とか親とかが、相手はどのような家なのかといつて身元調査をするんですね。その身元調査の目的は、相手の若者がどういう青年なのか、どういう女性なのか、その評判を聞くということも目的に少しはあるでしょう。でもほとんど99パーセント以上の最大の目的は、相手の家が被差別部落出身なのか、いわば同和地区出身なのかどうなのか、その事を調べるといふのが、最大の目的だったわけです。私もそれまで20数年間生きてきた中でそういう事例をいっぱい見てきました。「誰々さんのところが結婚するんやと。でも調べてみたけど大丈夫だったみたいよ」とかね。そういう話をいっぱい聞いてました。だから、母が調べとかないかなんていうことは、ピンとききました。相手が部落かどうか、同和地区かどうかを調べないかと言ったわけです。 つづく